

星の名のを持つ伝説の女戦士と二代目客員神姫

天龍神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語はとある養女に引き取られた少女が宇宙と星座が好きな少女と出会ったことで始まる物語。

さあ!! 祝え!! 新たなる歴史の一ページの誕生を!!

時は令和になつて約10年少女達が出会つたことで物語は加速する!!

目

次

序章

ファイル1

運命の出会い

星と龍

8 5

1

序章

ミッドチルダのある場所にてガス爆発による火災が発生し、新たに新設された時空管理局はそれに当たっていたのであつた。

だが、時空管理局も上層部の汚職などによる隊員不足で手が回らないという状況に陥った為、急遽、各異世界の次元武僧並びにギルドに要請が掛けり救助活動に励んでいた。

「……はどう？ 熱いよ!!」

密かに行われていたクローン人間実験の壊れたカプセルの中から4歳くらいであろう髪色は前髪に赤いメッシュに黒い長い髪、そして何より両目の瞳の色が右が青で左が金色と言う変わったオツドアイの少女が布を切り抜いて作られたのである肌着に裸足で燃え盛る炎が揺らめく火災現場を歩き出したのであつた。

しばらくして、建物の入り口らしい場所に出た少女に、

「グラ……ガシャアア!!」

「キヤアアツ!!」

目掛けてモニュメントとして作られたのであろうオブジエが根元が折れて倒れてきたのだ。

この状況を表すならば「絶体絶命」・「万事休す」だろう、だが、少女に女神が微笑んだとしたらどうだろうか、

「あれ？ ボク、生きてる？」

「貴様、まあいい、脱出するぞ!! しつかり捕まつてろ!!」

「え?」

そう黒紫のハイブリットツインテールにサイバーゴーグル何よりヨーロッパの軍服に近い服装で腰に日本刀を指し、倒れてきた巨大オブジエを真つ二つにして助けてくれたのは神姫化したコードネーム「閃光」または「アスナ」などを持つ客員武僧にして鳴流神家末妹「鳴流神龍音」であつた。

少女は目を大きく見開て言葉を失つたのは言うまでもなかつたが急を要するため龍音は鞘に刀を納めて発見した少女を抱えて先ほど壁をぶち抜いて来たのであろう穴から空へ飛び立つたのだ。

「この子どもを頼む」

「わかつた、アスナ」

「待つて」

少女を助け出した龍音は実姉にして若干十五歳で医師免許を手に入れた鬼才コードネームは「絶剣」である鳴流神家長女「鳴流神龍美」に少女を預けてまた現場へ向かったのであつた。

少女はお礼を言おうとしたがもう既に龍音は行つてしまつた。

その後無事に火災は收まり現場を時空管理局に預けて龍音は姉に預けて少女が居る超神次元ゲームギョウ界のプラネットユース設けられている「プラネットユース教会」の前に立つていた。

「あの子、元気になつたつて言つてたけど」

「お姉さまの腕を信用していないんですか？」

「そうだね、行こう」

あの時とは違ひ龍音は腰まで伸びている黒い艶やかな髪をポニーテールに結つてボーアイツシユな格好でインテリジエントデバイス「玄武」に言われて教会の中へと入ったのであつた。

その場所は龍音にとつては懐かしく思い出深い場所でもある、中に入つて、親を亡くしたり、捨てられたりなどで行き場がない子供達を育てる施設がもうけられておりそこに火災現場から助け出した少女が預けられているのだ。

どうやら助け出した少女がクローンらしく何より自分達と同じ「神姫」の遺伝子を持つてゐるのだ。

時空管理局に預けるわけにもいかず超神次元ゲームギョウ界のプラネットユース教会で預かることになつたのだ。

そして、龍音は施設の自動ドアを潜ると、

「お姉ちゃん、あの子は？」

「大丈夫、おいで」

「はい・・・!!」

「初めてまして、院長先生の妹の龍音って言うんだ、よろしく」

「うん、よろしく・・・さん」

龍美が用意したのであろう子ども用の赤と黒のパークランピを着て、リボンで龍音と同じポニーテールに結った少女は感じ取つてのであろう龍音が自分を助けてくれた人物であると。

運命の再会を果たした瞬間であつた。

ファイル1

運命の出会い

ミツドチルダにて起きた火災事故から十年が経ち、龍音に保護された少女は何不自由なく育ち今年で中学二年に差し掛かつたのだ。

「明日から新しい学校だけど、大丈夫?」

「心配しなくとも、ボクは大丈夫!! 下宿先の人と仲良くできるから!!」

「お姉ちゃん、あわてんぼうだから」

「それは言わないで（。△。）ノ ふう、あれから十年なんだよね」

龍音に保護され超神次元ゲイムギョウ界のプラネテユース教会の養護施設に預けられた少女は龍音が養子に引き取ることになったのだが当時十四歳で引き取ることになり、龍音が高校を卒業と同時に幼馴染みである最愛の神崎和真と結婚し次元武偵を引退と言わないが嘱託ポジションに落ち着きマイホームもプラネテユース領内に購入してそこで一緒に住むことになつて一姫二太郎の妹と弟達そして自身も養子に引き取つてもらつたこともあつて義母と同じ次元武偵の道へ進む決心をして現在、努力の甲斐あつて客員だが乙級の資格を手に入れてのだ。

義母や義理伯母や祖父母たちから天然理心流と呼ばれるあらゆる武術に精通した流派を学んで学問所では同い年の子達には仲よくして暮らしていたのであつた。

治癒術も最高難易度までスピード修得してしまつたのであつた。

今までラタトスクが運営している学問所で学んでいたのだが、龍音がちゃんとした学校に通わせたいと思つて夫と相談し、観星町にある観星中学に転入させることになつたのであつた。

そして、翌日、

「どんな子が来るのかな?」

「女子が良いな」

「美男子に決まってるわ!!」

観星中学では転入生の話題で大騒ぎしており特に少女が転入するクラスは美少女か美男子かでもめ出していたのであった。

しばらくして担任の教師が入つて来てクラスの全員が席に着いた。「さつきから騒いでいたみたいだから、わかつてゐみたいだし、今日からこのクラスに新しい子が入る。 入つて来て!!」

「(女子だ)」

「(男よ!!)」

「(仲良くできたら良いなー)」

担任が生徒達の反応を見て感づいていたようで転入生が来るることを宣言し、転入生に入つて来るよう言ふと生徒達は期待に胸躍らせていたのであつた。

「失礼します!!」

「よつしや～女子だ (▽_▽) !!」

「ウソよドンドコドーン (。・。)」

「コラく、く、く、く!! 静かにしなさいく、く、く、く!! え～と、名前を黒板に書いてくれるかな?」

「はい!!」

教室の引き戸が開いて入つてきたのは観星中学が指定している水色のセーラー服を着て黒い長い髪をボニーテールに結い背も義母にも劣らないほど伸び同じくらいのスタイルに成長し、チャームポイントの前髪の赤いメッシュに右碧左金のオツドアイにアホ毛もある少女が入つてきたので教室の男子一同は大喜びで机の上に立つたりする者もいれば、逆に女子は今まで流暢な滑舌だったのだがショックが大きかつたのか何を言つているのかわからない状況になつてしまつたので担任教師が場を収めて、少女に名前を黒板に書いてほしいと言つて少女が白いチョークを取つて縦書きに名前を書いて行つた。
「今日からこのクラスで一緒になる、神崎龍愛^{りあむ}夢と言います。よろしくお願ひします!!」

「女子だけど、かつこいいわ (▽_▽) !!」

「え～と、席は、星奈の隣だ、わからぬことがあつたら星奈に聞いて

ね。ではホームルームを始める!!」

「わたし、星奈ひかる、よろしくね（へーー）ー☆」

「ああ、改めて、神崎龍愛夢、よろしく」

義母から龍となり愛と夢を持つて生きてほしいともらつたを書き担任教師から席を教えてもらつて着席すると隣になつた濃いピンクに前髪はぱつつんに自分と同じアホ毛搭載のツインテールの少女「星奈ひかる」と握手を交わし授業を受けることになつたのであつた。

この出会いこそが龍愛夢の人生に影響する大事件に巻き込まれるとはこの時は思つていなかつたのであつた。

星と龍

観星中学に転入した龍愛夢はあつと言う間に学校中の話題のネタにされるほど注目されていたのであつた。

「神崎さん!! お願ひ!! ゼひ!! 剣道部へ!!」

「すいません。やれやれ、これで何回目だろ?」

『今のでちょうど二十回目ですよ!! 転入初日から人気者ですから』

「自分の身体能力を今になつて呪いたくなるよ」

龍愛夢は初日からいつもやつていてる感じで授業を受けていたのだが、体育の授業で担任教師すら目が点になるくらいの記録を打ち立てしまつたことで運動系の部活の勧誘が後を絶たず特に義母譲りの武術センスを持つてるので仕方ないことだと受け入れたのであつた。

特に剣道部からの勧誘に至つては龍愛夢が何度も断つても辞めずに勧誘するほどであつた。

もちろん龍愛夢にも専用のチョーカー型インテリジェントデバイス「ロン」が主人である龍愛夢を茶化したのであつた。

今は外しているが。

「お~い、一緒に帰ろうよ!!」

「あ、待つて!!」

そこに同じクラスメイトになつた星奈ひかるが声をかけてきたので一緒に帰ることになつたのであつた。

これが龍愛夢の運命を左右することになろうとは誰も知る由もなかつたのだから。

わたし、星奈ひかる、観星中学に通、中学二年生、今日は何と転入生がやつて來たんだよ!! 名前は神崎龍姫夢《かんざきりあむ》、背も高くて髪は夜空のように輝いて、前髪が夕焼けのような色で、自分の事は「ボク」つていうちよつと変わつた女の子、仲良くできればいいなつて思つて声かけてみたら文武両道で才色兼備だから一変クールで人見知りかなつて思つたらすぐに仲良くできちゃつた。

一緒に帰ることになつたんだ

「そういうえば、龍姫夢って、単身でこつちに来たって言つてたけど」「あ、本来なら、お義母さんお義父さんの母校に行くつもりだつたんだけど、話し合いの結果、観星中学に通うことになつて、二人とも仕事とかで離れられないから、下宿先を用意してもらつて転入してきたんだ（ゲームギョウ界から通うのは不味かつたし、何よりプラネテューヌの中学生じゃコネじやないかつて言われるから）」

「もし、困つたことがあつたら、遠慮なく、わたしに言つて」

「わかつた」

学校から下校中、龍愛夢とひかるはすぐに仲良くなり、龍愛夢もいつかひかるなら自分の事を話せるだらうと思つていたのだろう、武偵所では「客員神姫の義娘」と呼ばれ、疎まれていたからなのだろう、龍愛夢とつて、ゲームギョウ界以外で初めて出来た友達なのだから